

広島学院宗教活動通信 (復活祭特別号)



希望

第  
62  
号

2019年4月12日(日)

発行 広島学院カトリック研究会  
〒733-0875 広島市西区古江上  
1-630

☎082-271-0241

※題字は中村寿樹先生



「最後の晩餐」 Jacopo Tintoretto

## 「生きた教科書」

森 晃太郎 S.J.

あなたにとって先生とはどんな存在ですか。学校で働き始める前、親友に先生になるとはどういうことか聞いてみた。彼は「みんなが『先生』って呼んでくれたら先生じゃない」と言った。それは、建前や肩書としての先生ではなく「この人から何か学ぶことがある、学びたいことがあると思った人が『先生』と呼んでくれる」ということらしい。この2年間で私はみんなの「先生」になれただろうか。

私の理想の先生は、1998年放送のドラマ『GTO』の鬼塚英吉である。教科書に

は書いていない型破りな生き方がカッコいい。『Poison～言いたい事も言えないこんな世の中は～』の歌詞にあるように、自分を認めてもらえない、大人に信じてもらえない、生きる意味がわからない思春期真っ盛りの10代に、自分の立場や利益よりも生徒を思い真つすぐ生きる姿が好きだった。生徒と共に生きるその姿が生きた教科書だった。

学校の教科書は、自分の「残された人生」という制限時間の中で答える正解を教えてくれるだろうか。卒業ソングの1つRADWIMPSの『正解』はこのような歌詞で終わる。

次の空欄に当てはまる言葉を書き入れなさい  
ここでの最後の問い

「君のいない明日からの日々を僕は/私はきつと」

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

制限時間はあなたのこれからの人生

解答用紙はあなたのこれからの人生

答え合わせの時に私はもういない

だから採点基準はあなたのこれからの人生

人生は選びの連続である。しかも自分の人生という解答用紙に答えられる「道」は1つしか記入できない。そのため「大丈夫」と思える結果を未来に置いてから決断しようとする。しかし、正解を教えてくれる教科書に見通しや計画というレールを引くための情報はあがるが、自分の枠を超えて起こる未来に対する答えがない。だから、大事な決断のとき「こうしたい」「こうなりたい」という望みと、それに相反する恐れや躊躇いで決断できない自分に葛藤する。そんな確実でない未来に1歩踏み出せないでいる自分に「それでいい」と確信と勇気を与え、自分の人生を採点する基準を教えてくれるのが生きた教科書である。

人生の中で生きた教科書に出会えることは仕合せだと思う。中島みゆきの『糸』の歌詞にある、人と人との出会いを結ぶ「仕合せ」は、他者の存在が絶対条件である。しかし人は、自分の幸せのために互いを使い使われ合う関係にしてしまう。人のためにすることも義務化され終わらせるだけになると、苦労も苦しみでしかなく、終わったことへの満足感や解放感のような一時の幸せはあるがまたすぐ幸せに飢える。仕合せは、Superflyの『愛をこめて

花束を』にあるように、大事な人に渡す花束に愛が込められていることが重要である。自然と込みあげてくる愛に、相手を思う気持ちや様々な困難や失敗、戸惑いや喜びを共にした歩みが込められている。そこで生まれた目に見えない愛の目に見えるしるしが花束であり、それを渡し受け取ることが互いを豊かに満たし仕合せにくれる。生きた教科書との出会いが仕合せなのは、その教科書に込められた他者の愛に気付くからである。

カトリック教会で毎年4月頃に祝う復活祭は、イエスが愛を込めた自分の人生という花束を私たちが受け取ることを意味する。この花束には、弟子たちの先生であったイエスが最後の晩餐の席で彼らの足を洗い、互いの足を洗い合う仕合せの生き方に招いたこと。十字架の死によって自身の言葉である「友のために命を捨てること。これ以上に大きな愛はない」という“Men for others”を体現したこと。死んだはずのイエスが「この世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」という“with others”を弟子たちが実感し喜んだ出来事が込められている。弟子たちにとってイエスは、生きた教科書であり残りの人生のすべてを賭けるだけの価値ある採点基準だった。生きた教科書に刻まれた“Men for others with others”がきれいごとでないのは、言葉でなく、行いによって葛藤や苦労や困難を伴いながらも、いつも誰かを思いその誰かと「共にいる」実感を伴いながら生きるからである。

自分がそうなれたかはわからない。ただ日々の苦労の中で関わる1人1人を思い、

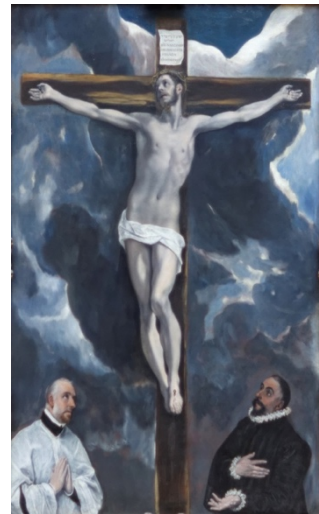
共にいる喜びからその苦勞を見ると希望が湧いてきた。そしてその苦勞は、みんなの目が生き生きとした瞬間、合わせという実りとなり、私を先生にしてくれた。私は鬼塚英吉のような生き方も教科書のように正解を教えることもできない。ただ誰かに助けられながら、足りない自分、失敗だらけの自分、完璧じゃない自分で、真っすぐに全力で生きる。だからこそ、自分のいのちを賭けて生きるだけの価値あるみんなに出会えた2年間だったといえる。共に生きたこの2年間が、先生として魂込めていのちを献げた「生きた教科書」となっていたらと願っている。さあ Mr.Children の『終わりなき旅』でも聴きながら、新たな道を歩き始めよう。人生という終わりなき旅の続きへ「よーい、はじめ」



## 聖週間 2020

Claudien BAGAYAMUKWE S.J.

カトリック教会は枝の主日から聖週間に入りました。聖週間とは？この質問に答える前に、万物の創造について簡単にふれておきましょう。旧約聖書の創世記によれば、初めに神は天地万物を、つまりこの宇宙を創造し、最後に人間を創造しました。当初人間は幸せに暮らしていましたが、あるとき蛇の誘惑によって、神の意に反し、罪を犯してしまいます。その結果人間は神の愛から離れて、死と苦しみの世界に入ります。この憐れな人間を己の愛に戻らせるために神はイエス・キリストをこの世に遣わしました。クリスマスには、このイエスの誕生を祝いますね。人間が神の愛に戻るように、すなわち苦しみから救うために、イエスは苦しみを受けなければならなかったと新約聖書にあります。カトリック教会は聖週間にイエスの受難、死、復活を思い起こします。教会にとって聖週間は特別な時なのです。



聖週間には聖木曜日、聖金曜日、聖土曜日という三つの特別な日があり、まず聖木曜日にイエスの最後の晩餐を思い起こします。この晩餐の間に主であるイエスは弟子たちの足を洗いました。この模範に従って、弟子たちだけでなく、私たちが互いに足を洗いあうようにと招かれています。互いに足を洗うとは、互いに仕える、という意味を表します。この模範を示した後で、イエスは弟子たちに新しい掟を与えました。「互いに愛しあいなさい」という掟

です。この晩餐の後、イエスは一人の弟子の裏切りによって逮捕され、受難の道を歩みはじめます。

聖金曜日というのは、イエスの受難を思い起こす日です。受難の物語をとおして、カトリック教会は、苦しみの道、すなわち十字架の道をたどるイエスの神秘を黙想するようにと招きます。教会にとって、十字架はとても大事な印なのです。十字架は死の印というよりも、人間の救いと希望の印です。十字架の道はイエスの道だけでなく、わたしたち皆の道でもあります。一人一人の人生には喜びだけではなく、悲しみや苦しみもありますね。

今まさにわたしたちは新型コロナウイルスの感染拡大による苦しみのさなかにあります。先行きは見えず、不安に慄き、絶望感に襲われている人も多くいます。イエスの死と復活を通して、十字架、つまり苦しみや悲しみは決して終わりではない、ということをおぼえることができます。夜がどれほど長くても、朝は必ず来るのです。

聖土曜日は、イエスの死と復活を思い起こす日です。イエスが復活しなかったら、キリスト教は存在しないし、フランシスコ・サビエルやアルペ神父は日本に来なかったでしょう。広島学院も存在しない。イエスが復活したからこそ、キリストの教えは全世界に広まり、苦難の中にある多くの人々に生きる力と希望を与え、イエズス会の学校に存在の価値を与えているのです。イエスは受難と死に打ち勝って、私たちに命を与えてくれました。人生は悲しみや苦しみで終わることは決してありません。イエスの十字架上の死によって、愛が憎しみに勝ち、命が死に勝ったからです。

誰にでも挫折はあります。逆境に遭遇し、絶望の淵に立たされることも一度や二度ではないでしょう。勇気をもって頑張りましょう。常に希望を胸に闘いましょう。決して一人ぼっちではありません。イエスがいつも共にいてくれる、これがイエスの復活という福音の真髄です。



## 2019 年度中 1 IL 授業より

中 1 (64 期) の I L は、二学期以降は森先生に授業をしていただきました。二学期は山口サビエル記念聖堂訪問へ向けてフランシスコ・ザビエルの生涯を学習し、三学期は聖書の有名なたとえ話をいくつか読みました (小松原有子)。

### 〈二学期まとめのリアクションペーパー (ザビエルへの手紙を書いてもよい) より〉

○元気ですか。ぼくは、とっても元気です。その理由は、授業であなたのことをたくさん知ったからです。知ったことが多すぎるので一つだけ説明します。それは、あなたの旅です。いろんな危険が目の前にたちはだかっても、諦めないあなたの燃えさかる心は、とてもすごいと思います。ぼくは、授業で知ったあなたの本当のすごさをどんな時も頭に入れ、この一生を全力で生きます。

○自分の命をほかの人に使った生き方がカッコイイ。

○ザビエルが上陸して日本で宣教してから、その後どうなったか初めて知った。中国へ布教しようとして途中で亡くなったという事実は意外だった。

○ザビエルは自分の命をキリストの使命のために使っていたので、僕にはとてもマネできないな、と思いました。ザビエルが天皇に会えなかったときに、よく心が折れ

なかったな、と思いました。

○ザビエルのことを今までは何が起こっても冷静で正しい答えを導き出せるような人かと思っていただけで、2 学期の授業でザビエルが意外に情動的で色々な間違いをしていたと知りびっくりした。

○自分の命をさし出してまで、夢中になることができるのはすごいと思う。いきなり決められた出港でそれから母国に帰れないのはかわいそうだったと思います。僕も自分が夢中になれるものを見つけ、悔いがないようにしたいです。

○ザビエルの旅はキリスト教を世界に広めることであって生きて国に帰ってくることではないということがびっくりした。ザビエルにとってキリスト教はそんなに大事で大切なものなんだなと思った。クリスマスがザビエルが持って来たらしいのでそのことには感謝している。ザビエルはキリスト教を信じ、広めることに使った人生だった。自分もそういう夢中になって人に役に立つ何かを人生の中で探してみたいと思った。ゲーム感覚で学ぶことによって一層理解が深まった。

○ザビエルは元々キリスト教が好きな感じなのかと思っていただけで、本当は最初のころはキリスト教が嫌いだったというのは意外でした。ザビエルが、キリスト教を広めようとする思いや行動も、自分の想像よりも大きくて大胆だったので、それにはおどろきました。

## 〈三学期前半振り返りプリントより〉

### ・『地の塩、世の光』

○心理テストを通じて自分のことを客観的に見ることができた。

○自分らしいところや、自分の特技、自分にしかできない事を探して、どんどん活用していこうと思った。特に人を助けることができるなら、喜んで使おうと思う。

○自分だけでなく周りも輝かせるということについて学ぶことができた。

○持ち味を出すことに重要な意味があることを実感した。これからは、自分の持ち味を積極的に出していきたい。

・『種を蒔く人』のたとえ〈入学式で読まれた聖書のたとえ話。自分を「土地」「種」などさまざまな立場に置いて読むと、解釈が広がることも実感しました。〉

○「広島学院にはたくさんの宝があるけれど、それは自分の手で掘り起こさないといけない」という先輩の話を思い出しました。これからも心の中に「良い土地」をたくさんつくって、「種」を育てていきたいです。

○つまらない授業でも石をとりのぞけば成長するということが一番しっくりきた。入学式のことをだいたい前に思えてなつかしくなった。これからも成長していきたいと思った。

○自分は良いところに落ちた種だと思っているのでこれから頑張ってどんどん成長していきたいと思います。

○自分の受け止め方やその時の態度によって、全くちがうものになると思います。少しテレビを消して机に向かうのも悪くない……。

○聖書では、よくたとえが使われているなと思いました。たとえの中でも様々な視点から物事を見ると、まったく違う受け取り方ができました。聖書には良いたとえがたくさん使われていて、もっと読みたくなりました。



## 60期ILP【もっと沖縄学】振り返り

高2のILゼミ「もっと沖縄学」では、希望者で2019年12月21日から12月25日まで沖縄を訪問し、第二次大戦における米軍の沖縄上陸の際に、現地の人々が逃げた道を歩きました。ここでは三人の参加者の感想をご紹介します（倉光望）。

### 「負の沖縄」



今回僕が「もっと沖縄学」に参加した理由は、修学旅行の前に沖縄について知ること、修学旅行でより多くのことを得られればと思ったからだ。実際、今回の研修で沖縄の背景にある様々な問題を知ることができ、修学旅行ではあまり多く触れないであろう沖縄戦についても深く学ぶことができた。

まずは、沖縄戦について学んだことを書くと思う。最も記憶に残ったのは、学徒隊として沖縄戦を経験した與座<sup>よざ</sup>さんの話だ。僕が今までに戦争について話を聞いてきた人で軍のもとで作業をしていた人は

いなかったの、貴重な話を聞くことができたと思う。途中で体力に自信がない人は手を挙げるように先生が言ったが誰も手を挙げなかったという話に対し、手を挙げなかった理由を質問すると、国に対する忠誠心が薄れてはいけないと思ったからだと答えていただき、僕はほかの人に対して申し訳ないから手を挙げなかったと思っていたので、教育の力は恐ろしいなと思った。また、戦争で日本が勝っているという嘘の情報を信じていたと聞き、嘘の情報に騙されないようにとされているけど、国によって情報が規制されている中、いつ死んでもおかしくないような状況に置かれて情報が嘘かどうか判断するのは無理だと思った。現在中国では情報が規制されているという話を聞いたことがある。一度情報が規制されてしまうと情報を規制されていることに気づくのが難しくなってしまうので、日本もそうならないように自分たち国民が注意していないといけないと思う。

次に、沖縄の現状、ここでは特に基地問題について書いていこうと思う。嘉手納基地を見たとき、想像以上の大きさで驚いた。先生から救急車なども基地の周りをまわっていないといけないと聞き、僕が思っていたより大きな負担を沖縄に押し付けているのだと実感した。また、米軍ヘリの部品が落ちてきた保育園の園長先生の話聞いて、最も印象に残ったのは当事者の訴えを適当に流そうとする日本政府の対応だ。当然対応にあたっていた人も内心心を痛めている部分もあるのかもしれない、国策上仕方がないことなのかもしれない

が、せめてもっと誠意ある対応をすべきだと思う。基地問題の最も大きな問題は被害を受けている側が少人数なのでいくら訴えても世論が動かないことだと思う。この状況を解決する方法は僕にはわからない。話を聞いて心は動いても焼け石に水程度のことしかできないもどかしさを感じた。

最後に、83.5km歩いた感想を書こうと思う。個人的には歩いた三日間の内、初日が圧倒的につらくて残りの二日間は初日終了時点で思っていたよりはつらく感じなかった。初日に足の親指が出血で変色し、今まで見たこともないような大きな水ぶくれができ、残りの二日で僕の足はどうなってしまうのだろうと思ったが、あまりひどくなることはなく、荒崎海岸に辿り着くことができた。荒崎海岸に着いたとき、この地で命を失った方のことを思い、若干の後ろめたさを感じながらも、やっと終わったという解放感を感じた。これだけの長い距離を歩いた経験がこれから先生きればいいなと思う。

僕がこの研修を通じて思ったことは、戦争がなく毎日安心して暮らせる今の日本はいい世の中だなということである。與座さんが戦争のつらさは体験した人でないとわからないとおっしゃった。たしかに僕には戦争のつらさは今回のような経験を通して想像することしかできない。想像するだけでもある程度悲惨なイメージは思い浮かぶのだから実際はもっと悲惨なのだと思う。そんなつらいことは絶対に経験したくない。今回思ったことを忘れずにこれから過ごしていきたい。(RF)

## 「沖縄を歩いて」



戦争の悲劇を語り継ぐのはできないだろう。僕が「もっと沖縄学」を通して何度も確信したことだ。

「この荒崎海岸は米兵の乱射から逃げるひめゆり学徒隊の先生と生徒たちが追い詰められて、手りゅう弾で自ら命を絶った場所です。」そんな説明を聞き慰霊碑も目にしたが、海はどこまでも透き通ったエメラルドグリーンで激戦区の一つだったことをイメージするのは困難を極めた。

現地で信じられない話を耳にした。当時集団自決のあったチビチリガマを16～19歳の数人の少年達が肝試しに使い、千羽鶴が引きちぎられ、洞窟の奥にあった遺品の坪や瓶などが割られる事件があったという。事件は少年達を「何も知らない人」にさせてしまった。きちんと戦争についての教育をしていない大人たちにも非がありまた沖縄県でさえも当時の惨状を語り継いでいないとも言える。

当時の惨状について「何も知らない人」が荒崎海岸を見ると美しい海としか思えないだろう。今回の僕らみたいに知識を身



に着けてから見ると、確かに美しい海だとは感じるものの当時の惨状について考え、悲痛に思うだろう。沖縄戦に巻き込まれた人を見ると、美しいと感じる前に当時の惨状、トラウマ、あるいは亡くなってしまった家族、友人を思い出し胸が詰まり泣き崩れることもあるだろう。このように同じ光景を見ているはずなのにそれぞれに見えているものは全く別物である。

戦後75年を迎えようとして語り部もほとんどいないのが現状だ、例えば語り部の方々が血を込めて当時の惨状を伝えたとしても、当時のことを知らない僕らはできても想像あるいは感情移入までが限界だろう。今回80km以上歩きカロリーメイト4箱と水だけを持って空腹や先が見えないことの恐ろしさについて当時の人の追体験をしたものの当時の人は常に命の危険にさらされていて、衛生状態も非常に悪く追体験では体験しきれない辛さ苦しさが数えきれないほどあったことは明確だ。このように当時の惨状を伝え続けるのは不可能に近いがだからと言って、「何も知らない人」のまましていると、戦争はすぐにでも繰り返されることとなるだろう。当時の惨状に目を背けると…繰り返されてしまうのだろう。(IK)



## 「沖縄フィールドワーク」



沖縄から帰ってきて空港について全然違う気候を肌で感じて、改めて沖縄は日本の中でも特異な場所だったなとしみじみと感じました。僕自身は沖縄に行くのは5回目ですが基地の存在、街の雰囲気などに驚き等を感じることはありませんでしたが、観光業が盛んな北部ではなくガマ等の自然や、サトウキビ畑のある南部に行くことはほとんどなかったので沖縄の今まで見たことのない一面を見ることができ新鮮さを感じながらで沖縄を見ることが出来ました。僕の中では沖縄という場所は海がきれいなちょっと海外っぽい感じがするリゾート地みたいなイメージしかなかったのですが、今回のゼミで沖縄の負の歴史、今なお抱える問題を多く学び沖縄に対するイメージが大きく変わりました。

僕がこのゼミの中で最も印象深く残っているのは鉄血勤皇隊の方の体験談です。説明板での説明、戦争教育用の映像などで当時の状況がある程度知ることができますが、実際に体験された方のお話は具体的

であり、説明板などとは違い主観的視点から語られるのでとても生々しくあり、その語りの中に感情が込められており戦争の現実感が色濃く伝わってきました。広島でも小学生の頃に原爆被爆者の方から直接お話を聞く機会がありその時の話を今でもうっすらとは覚えています。今振り返るとあの頃の自分は多分伝えたかったことの一割も理解できていなかったのではないかと感じます。

沖縄で各所をめぐる中で特に印象に残っている言葉とは「海が米国の艦船で真っ黒に染まった」という言葉でした。初めは正直言って信じられませぬし脚色があるだろうと思っていたのですが、先の方に誰かがこのことを質問して本当に海が黒く染まったとおっしゃられて衝撃を受けました。その後ずっとそのもやもやを抱えながら歩き、フィールドワーク三日目の最終目的地の荒崎海岸に到着して広大な水平線を眺めやはり信じきれないなと感じました。またそれと同時に自分は今回のゼミを通して沖縄の戦争を全然理解しきれなかったなと感じました。様々な方のお話を聞き、映像を見て沖縄戦についての知識は少なからずついたかと思いますが、様々な激戦地跡を巡り、集団自殺の行われたガマも訪れたにもかかわらず当時の沖縄戦の壮絶さを思い浮かべるも恐らく実情に程遠く、自分の沖縄戦の過酷さに対する認識の甘さを痛感しました。戦争を客観的に見てその実情を理解することはやはり難しすぎるし、少なくとも僕には完全に理解は絶対にできないということを感じました。後に戦争体験者がいなくなり後世にその

子孫が語り継いでいく時代が訪れたときに戦争の悲惨さがしっかりと継承されていくのか少し不安になりました。僕ら戦争を体験していない人たちの言葉でどうやって後の人たちに戦争のむごさを伝えていくのか、戦争教育の大きな課題も身をもって実感したような気がします。

ゼミが終わって思い返してみると約85キロを栄養補助食品で歩ききったというのに未だに驚いていますが、考えてみれば戦時下は満足に栄養が取れず、砲撃という恐怖に追われ、また道も全然舗装されていない中多くの方が歩き生き残ったということを考えれば僕らは歩いて当然なのかなとも思います。今回のゼミを通して様々なことを学び、歩く中で色々な経験もしてこれが自分の今後にどのような影響を与えるかはわからないですけど、今回の経験は絶対に生きてくと思うし、生きさなければいけないと思います。このゼミに参加して少しは人間的にも成長できたかなと思います。(TH)



## 61 期釜ヶ崎研修

1月3日～5日、高1のカト研生徒9名と橋本先生・私の11名で釜ヶ崎（大阪市西成区、あいりん地区）研修を行いました。釜ヶ崎のまちもどンドン様相を変えています。昨年の労働センターの閉鎖、進行するおじさんたちの高齢化、増える外国人バックパッカー、大型再開発の計画、急増する中国系居酒屋・福祉施設……などなど、これまで何度も釜ヶ崎を訪れて来た私にとっても考えること・感じるが多かった研修でしたが、参加者一人ひとりにとって有意義な3日間となったように思います。2名の生徒の「体験記」をここでは紹介したいと思います。（小林篤）

### 「釜ヶ崎での経験から考えたこと」

僕が釜ヶ崎で一番大きく感じたことは、日本に潜む金銭的な貧富の差と、それに対する認識の欠如です。

新大阪から電車で大阪の街並みを見ながら、やはり広島とは違う(都会だなあ)と感じながら、新今宮で降りてみると、いきなり驚愕させられました。駅の出口から横断歩道を挟んで寝ている人がすぐそこにいて、実感のわかなかつた釜ヶ崎の現実を着いてすぐ目の当たりにすることになりました。そして横断歩道を渡っていると左手にあべのハルカスが見えて、自分は日本という国を何も理解してなかったとその時思いました。僕たちは学院に通うことができ、生活に困ることもなく暮らすことができているのですが、世界には、そうではない人々がたくさんいるという認識はもともとありました。しかし、寒い正月さえも



外に布団を敷いて過ごさなければならぬ人が日本にそれも日本有数の都会の大阪のなかにいるという現実は、僕の日常からはとても想像しがたいものでした。幟町での炊き出しに参加したこともありますが、実際路上で人が寝ているのを見たのは初めてですし、おそらく広島に住んでいる人のほとんどがそうなのではないかと思っています。

一日目に、釜ヶ崎で活動されている生田さんのお話を聞きましたが、その中で最も印象に残ったのが、釜ヶ崎と、そこで暮らすホームレスに対する偏見、差別についてです。ホームレスとは無縁の生活を送っていると彼らへの理解はなくむしろ怖いという感情が起こるのは自然なことだと思います。しかしその感情が例えば親と子、先生と生徒といった形で共有されると、釜ヶ崎は危ない、ホームレスは何してくるかわからないから近づかないほうがいいなどといった偏見、差別が生まれるのだと生田さんはおっしゃっていました。そして、釜ヶ崎では、若者がホームレスを襲撃する事

件が絶えないということのについても話されていました。その中で例として、ある襲撃事件で犯人の少年の親を呼んだとき、その親は息子を「ホームレスに殺されるぞ」と叱ったという話がありました。この話を聞いて、やっぱり世代が変わると同時に差別や偏見が受け継がれているんだなあと思いました。そこで重要になってくるのが教育だと思います。僕たちは広島に学校に通っていますので、当然原爆については習い、皆きちんとした知識があると思います。しかし、それでも僕は長島愛生園の事前学習をするまでハンセン病患者が差別を受けてきたということを知りませんでした。なぜなら広島の小学校では、原爆のことを教えることもハンセン病のことは教えないからです。他の都道府県もおそらく小中高で原爆やハンセン病のことは歴史の1ページとしてしか習わないところがほとんどだと思います。そして釜ヶ崎にしてみれば教科書にさえ書かれていません。広島ではそもそも釜ヶ崎について知る機会がないのです。そして大阪でも間違っただけ知識が子どもたちに植え付けられています。だから、教育方針から改め、日本は国民全員が社会的弱者に目を背けない国にしていかなければ少なくとも釜ヶ崎の偏見、差別がなくなることはないと思います。

生田さんのお話を頭に入れながら僕たちは夜回り、炊き出しをしたのですがその中で僕は2つのことを感じました。1つ目は、ホームレスの人たちは思ったより優しいなあということです。ホームレスのことを怖がっている人も実際話せばわかるとは思います、全く怖いなどということはない

く、むしろ怖いのは何も知らずに偏見を持っている人々だと思いました。しかし一方で、僕はホームレスの人たちの気持ちを考えていませんでした。こうして僕たちに食べ物や毛布を配られなければ生活できないことがどんなにつらいか考えるという最も大事なことを僕は見落としていました。これは2つめのことにつながりますが、彼らの気持ちはどうしても彼らにしか分かりえないこともあると思います。夜回りをしながら、僕はこれが終わったらホテルの暖かいベッドで寝るということを考えたらずらくなりました。僕たちは彼らを支援する側で彼らとは違って生活に困っていないという現実には胸が痛みました。そんなとき周りを見てみると、僕たちと同じ支援する立場であるボランティアの人たちがホームレスの人たちに「体調はどうですか」など優しく声をかけていました。やっていることは僕たちと同じでしたが、ボランティアの人たちは僕たちよりも人と人として接しているなと感じました。立場は違っても同じ人間です。この町ではみんなが助け合い、人としてのつながりを大事にするある意味ほかのどの町よりも人間らしさのある街だなとその時思いました。

釜ヶ崎でのホテル建設などの都市開発が進んでいるという話もある中で、仕事や生活に困る人が消えることはないと思います。もしホームレスの人たちが街を追いやられても彼らの存在がなくなるわけではありません。つまり、目を背け続けていては何も変わらないということです。釜ヶ崎を知らなかったら何もできま

せんが僕は今回実際この町で、3日間過ごしました。今度は僕たちが何かをする側だと思えます。この3日間僕たちは食べ物や毛布を配ることしかできませんでした。なのでこれからは、身近な人からでも釜ヶ崎について知ってもらえることが僕たちにできることだと思います。少しでも差別、偏見がなくなるように努力していこうと思います。カト研で釜ヶ崎に来ることができて、本当に良かったです。(KM)



### 「釜ヶ崎研修を終えて」

僕が特に印象に残ったことから3つ感想を述べさせてもらう。

一つ目は昔の釜ヶ崎の画像や映像と比べても環境がなにも変わっていないことだ。実際に現地に行った時、周りとは明らかに違う空気を感じた。それはタバコのおい、酒臭いにおい、そしてそれらはすべてそこで住んでいた人々がずっと出し続けているのだと感じた。誰の助けも借りずただひたすら他の誰にでもなく自分のために身を粉にして働き、疲れ果てて帰ってきてそれを何十年も繰り返している証拠のようにも感じた。夜回りの時ボランティアをしている方々に同じ質問をした。「この釜ヶ崎という場所、そしてそこに住む人たちに対して行政はなにか対策をしているように感じますか」と。答えは皆同じ、「全く感じない」実際は街灯も増えていた。全くされていないわけではないが、やはりそれはホームレスの方々が真に望むものではないのだ

ろう。釜ヶ崎ができたことにも、背景には万博を行うに当たって見せたくないものは隠したいという後ろめたい理由があると教わった。今もまさにそうなのだろう。そしてそんな中でも、ホームレスの方々が一生懸命に生きているというのも思い知らされた。これも夜回りの時、あるおじさんが僕の前に立って、「このマフラーかってくれよー。千円でいいから」と言ってきた。悪意があったのかはわからない。ただ、そこにはその人を含め三人の人がいた。一人なら買っていた、いや、買わされていただろう。周りのボランティアの人が入ってきて何事もなかったのだが。

そのあと、「日本にもああやって押し売りしてくる人がいるのですね。」と僕が言うと、「ただのみ代が欲しいだけだ」とある人が言った。何気ないことだが、果たしてそこまでしてお酒が欲しいのかと後になって思った。町には泥酔してめちゃくちゃ大声で一人怒鳴る人がいたり、コンビニに行けば客は必ず酒を買っていた。もしかしたらそうでもしないとやっていけないのではないか。当たり前のことだった。あの極

寒の中、毎日毛布一枚で寝てあったかいごはんもほぼ食えずに過ごす。越冬中でなくても過酷な労働の疲れは酒でしか癒せない。むしろこれで犯罪に走らないのは奇跡だと思っていた。そうならない理由は一日目に生田さんが話してくれた。「彼らにはハウスがなくともホームがある。それは人とのつながりがそうだ。むしろ彼らを襲う若者の方こそホームがない。本当の意味でのホームレスなんだ。」と。実際にはこれは教育を受けた中学3年生の言葉だそう。一つ下の子でもここまでの的を射た言葉があるのかと僕も感銘を受けた。釜ヶ崎の人々は何も現状が変わらない中、毎日を一生懸命に生きている。そのことに僕はとても驚いた。

二つ目は都市部との圧倒的な差だ。僕は二日目の自由時間中に大阪梅田、あべのハルカスを訪れた。そして釜ヶ崎に戻った時にその差異の大きさに驚愕した。ここは同じ大阪なのかとも思った。釜ヶ崎からあべのハルカスまでは片道わずか15分。直線のみだ。高架下をくぐればそこは本当に別世界だった。あべのハルカスの眺望から釜ヶ崎を見た。大阪の華麗な夜景の中そこだけは黒一色だった。三角公園からは冬の大きな三角形とあべのハルカスがとてもきれいに見えた。僕たちからは。彼らはどう映っただろう。光り輝くあのビルに抱く感情はなんだろう。そこはかたなく聞いてみた。よくわからなかったがあれも彼らが貢献したからこそできていたのは分かった。僕らが何食わぬ顔で利用する建物、それらは彼らの働きだっただけであることを僕は心にとめた。

最後はボランティアの方々についてだ。

さまざまな方がいらっしやった。女装をしている方、以前学校のボランティアで来られた方、息子に釜ヶ崎を知ってもらいたいと息子さんを連れて来ていた方、そして、以前日雇いをしていた方。境遇や動機はそれぞれだが、みんな彼らを助けたいという一心だったように感じた。そしてそれはすぐにできることではなかった。夜回りでホームレスの方に声をかけたとき、会話がどれもかみ合わなかった。どうしてなのかずっと考えていたが、その日の分かち合いで答えが分かった。自分の位置である。助けてあげようという上からの考えは、相手が何を欲しがっているのかが分かりにくくなる。大事なことは相手と同じ目線に立つこと。物理的な位置と同時に精神的にも対等になれば、相手の気持ちをまっすぐ感じ取れるようになった。学院の校訓でもあるMen for others, with others. とはこのことなのかもしれない。当たり前だけど今までそれができていたのか、意味を体で理解していたか。それを問われた3日間だったように感じた。(NI)



「いちカト研教員の思い」

山田 浩貴 (国語科)

現在、私が担当しているカト研は毎回2～3名の生徒が参加しています。

第2カト研究室に集合。開始時刻までは生徒は各自宿題をするなりして過ごしています。私は「だいたいみんな理系科目やってるよね。国語（筆者は国語の教員です）なんてしないよね～」とか冷やかしながら、その様子を見ています。

最初に聖堂でお祈りをします。唯一のイエス直伝の祈りである「主の祈り」を唱えることも多いですが、時には、その日のカト研で考えたいなと思うことに関わりのある祈りを取り上げることもあります。

第2カト研究室に戻り、長期休暇のあとやしばらく間があいた回には、「なんかあった?」「話せ、話せ」と生徒に催促します。生徒を口撃しているようにみえますが、実際には、生徒が話してくれることと、その日に考えたいなと思っていることとこじつけでもいいのでつなげられないかな、などと期待と焦りでいっぱいです。

一応テーマは設定して臨むことが多いのですが、もう高3になった学年なので、ほぼ雑談ですね。昨年度の3学期は「学院に物申す」的な内容になりました。私にとっては生徒の目線を共有する貴重な機会になりました。

ところで、雑談の中でも、できれば、一回に一度は聖書を読む機会を持つとうと思

いながら進行しています。どうしてもできないときも実は多いのですが、おもしろいのは、結果的に「あれ、前もここ読んだなあ」という個所が出てくることです。

シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼバダイの子たち、それにほかの二人の弟子が一緒にいた。シモン・ペトロが、「私は漁に出る」と言うと、彼らは、「私たちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何も捕れなかった。すでに夜が明けた頃、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分らなかった。イエスが、「子たちよ、何かおかずになる物は捕れたか」と言われると、彼らは、「捕れません」と答えた。イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば捕れるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまりに多くて、もはや網を引き上げることができなかった。イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚が載せてあり、パンもあった。イエスが、「今捕った魚を何匹か持って来なさい」と言われた。そこで、シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっ

ばいであった。それほど多く捕れたのに、網は破れていなかった。イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちは誰も、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であると分かっていたからである。イエスは来て、パンを取り、弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、あなたはこの人たち以上に私を愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、私があなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「私の小羊を飼いなさい」と言われた。二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、私を愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、私があなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「私の羊の世話をしなさい」と言われた。三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、私を愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「私を愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。私があなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。(以下略)」(ヨハネによる福音 21 章)

イエスが磔刑になった後、弟子たちが、いかに自らがイエスを求め、愛していたかを痛感する場面でしょう。全てが終わり、

もともと漁師だった弟子たちが、また猟に出ていく。そんな、気負いのない、のんびりした日常がなぜか私には思い浮かびます。そのなかで、まるで飼い主を見つけた仔犬のように駆け寄っていったにもかかわらず、「三度目も、「私を愛しているか」と言われた」ペトロが「悲しくなっ」て、という件が、私は大好きです。ペトロの泣きだしそうな顔までくつきりと思い浮かびます。

なぜこの場面を何度もカト研で読むことになったのか、その経緯は覚えていませんし、おそらく、私自身が掛け値なしに好きだからでしょう。「猟」や「魚」が何を意味するのか、そんなことは考えなくても、お話そのまま私は心が動きます。それで十分なのではとも思います。

主の祈りでは「天におられる私たちの父」と唱えられますが、イエスと弟子たちとのあいだにあったはずの、ごく人間的な部分でのつながりに思いを馳せます。

カト研では、生徒の発言を促しつつも、熱が入ってくると、「君たちがしゃべらなかつたらぼくがしゃべるよ」とか言いながら、自分がしゃべりきってしまうときがあります。生徒はきつと「ああ、また山田がしゃべって終わったな」と思っていることでしょう。そんなときは私自身も「しゃべっちゃったなあ～」と反省します。

生徒と別れたあと、カト研での自分の姿を振り返り、また反省します。それが人間的なつながりを生むものになっていただろうか、そして、そうなるためにはどうあったらいいのか。



「エルサレムに行って」

榎本博人（数学科）



(イエス・キリストが実際に歩いた道)

昨年の夏、個人でエルサレムへ行きました。韓国のインチョン乗り換えで、インチョンからテルアビブ空港まで、アラブ諸国の上空を通過できないので、遠回りして12時間かかりました。空港での入国審査は、かかる人で5分くらい質問があったので、無事に通り抜けるまでに30分かかりました。空港からエルサレムまで、乗り合いタクシーで45分、高速道路を疾走していました。テロなどの心配はあまりなく、落ち着いた街並みに居心地の良さを感じました。一番怖かったのは、旧市街のアラブ人地区で、戦争で使うような自動小銃を持った警察官を見かけたとき、ひとたまりもないと思いました。その次に怖かったのは、この乗り合いタクシー。シートベルト

は壊れたままで、荒い運転に、生きた心地がしませんでした。

初めてのイスラエル。聖書の場面に出てくる数々の場所に行くことに、まさか、本当に行くことがあるとは思っていなかったので、気持ちが高まりました。エルサレムの旧市街にホテルをとり、歩いて観光しました。イエスの墓がある、聖墳墓教会、オリーブ山のふもとにはゲッセマネの園、イエスがとらえられる前に、ペトロが泣いた、鶏鳴教会。ここにはイエスが2000年前に歩いたとされる道が残っていました。

路面電車に乗って、ヤドヴァシテム ホロコースト museum へ。ここは第2次大戦でナチスによるユダヤ人迫害について、展示されていました。過去に、アウシュヴィッツに2回、ダッハウ、オラニエンブルグ、ブーヘンバルト、ヴァンゼー記念館、プレッツェンゼーなど、ドイツの負の遺産を訪れましたが、その割からすると、こじんまりした展示でした。



(エルサレム旧市街)

深く印象があるのは、パレスチナのベツレヘムへ行った帰りのこと。路線バスがイスラエルとの国境に停まったとき、パレスチナ人は一旦バスから下ろされ、そのあと銃を持ったイスラエルの警察官がパスポートの確認に乗ってきました。おろされたパレスチナ人はどんな気持ちなのだろうか。いたたまれませんでした。

キリスト教、ユダヤ教、イスラム教の聖地であるエルサレム、1日に何度か、イスラム教のモスクからは、アザーン（礼拝に行くことを知らせる放送）が流れ、イスラムの国に来たことを実感しました。日本とも、欧米の先進国とも異なる文化を持つ国に行き、アザーンを心地よく聴いていることに気づき、いつの間にかその町の人になっている自分を見つけました。



(ゲッセマネの園)



(ベツレヘム)

異文化の体験。それはHPやテレビ、ガイドブックで見るのとは違い、実地で感じることです。もちろん個人旅行なので、リスクはすべて自分が負います。あたたかくしてくれた現地の人々、ホテルのスタッフ、こうした人々とのことが、ずっと心に残ります。観光地を巡ることよりも、現地の人たちと話をすることなどが、行く楽しみです。行くまではとても不安でした。しかし、イスラエルから運よく無事帰ってこられて、今までにない印象深い旅だったと思っています。将来機会があったら、ぜひ訪れてもらいたい、その価値がある国、都市であると思います。

「空の机」

松村康平（社会科）

偶然なのか必然なのか、職員室の中で、私の机はいつも牛尾幸生先生（イエズス会司祭、1951-2018年）の机の近くだった。例えば、先生の机の右隣だったり、あるいは左隣だったりしたこともあれば、ある年は右にジョディ・マグトト先生（イエズス会司祭、広島学院で英語を教えた後、現在東京にあるイエズス会管区本部で働いている）の机、左に牛尾先生の机という年もあった（つまり、二人のイエズス会の司祭に挟まれていたのだ）。

2018年、私は牛尾先生とちょうど背中合わせの位置にある席だった。牛尾先生の机には、いつも多くの数学の教科書や参考書が整然と並べられ、それらの間に、所々十字架やロザリオ、あるいは『マザーテレサの言葉』（牛尾先生に中1の時に数学を習った生徒は、その授業に入る前に先生が読まれていたことを覚えているだろう）などが置かれてあった。

牛尾先生は長い間病を患っていた。一時はあまり体調が良くない時期が続いたが、回復し、生徒に数学を教え、カト研を行い、日常を過ごしていた。後に、この回復していた時期先生は「この元気な時間を少しでも長く味わっておきたい」と他のイエズス会員に語っていたということを知った。

6月のはじめ、牛尾先生は体調を崩された。患っていた病が再発し、悪化のため

う授業ができないとのことだった。入院してから、3週間ほど経った6月20日（水）、イエズス会の森晃太郎神学生と一緒に、カト研の生徒を連れて、先生の入院されている病院にお見舞いに行った。病院を訪れた時、痛みと必死に戦っているその姿が、今でも私のまぶたに焼きついている。その次の日の6月21日（木）、牛尾先生は天国に帰られた。いつも牛尾先生が座っておられた机は空になった。

「ヨハネによる福音書」はイエスの復活の話を次のように語っている。

週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って、彼らに告げた。「誰かが主を墓から取り去りました。どこに置いたのか、分かりません。」そこで、ペトロともう一人の弟子は外に出て、墓へ行った。二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子のほうが、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあるのを見たが、中には入らなかった。続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も中に入って来て、見て、信じた（「ヨハネによる福音書」20章1-8節）。

弟子たちは空の墓を「見て、信じた」という。ここではイエスの不在は、存在しないことのしるしではない。それは逆に、存在していることのしるしとなっている。私たちは、誰か大切な人が側にいるときよりも、いないときの方がより一層その存在を感じるのかもしれない。

私の背中にあった空となった机は多くのことを教えてくれた。今まで広島学院という学校が牛尾先生をはじめ、神にご自身を捧げられてきた修道者の存在にどれだけ守られていたのかということ。イエスの姿や神の愛を語るができる場所を自分の存在と人生をかけて守ってくれた人たちがいたということ。いつかまた、天の国で再会する時、先生は笑っているだろうか。それとも、いつものように寡黙な表情の奥に暖かなまなざしをたたえているのだろうか。

私自身、これから様々な試みを受けるかもしれない。その中で最後まで神を信じ抜くことができるだろうか。それを考えると不安だ。しかし、先に天国に行った人々の姿に倣い、これからも祈りの中で、自分自身に与えられた恵みと使命を引き受けて、この生の歩みを踏みしめていきたい。空の墓を「見て、信じた」弟子たちのように、イエス・キリストの復活に希望を抱きながら。

## 「復活」の意味 The Meaning of Easter

「春分の日」の後の最初の満月の次の日曜日。カトリック教会で最大の祝日である復活祭はこのように決められます。今年は4月12日（日）が復活祭ですが、新型コロナウイルスの影響で日本を含め世界の教会では、皆で集まってお祝いをする事ができません。そのため、カトリックを担当する教員が、それぞれの想いを綴りました。

### ○小林篤（社会科）

「今、コロナのこともあり世界は暗く、どんよりとしていると感じます。悲しみが世界を覆っています。こういう時にこそ、『復活』は希望を思い起こさせてくれます。光や希望を失ってはいけない。単に『多分大丈夫』『絶対大丈夫』と希望的観測を打ち上げるではありません。復活は私たちが大きな絶望の中にあっても、少しずつ見えない力で現実化されていくものだと思います。私たち一人一人がイエスの『死と復活』を身近に感じましょう。広島が廃墟からここまで復興したことも私たちはもう一度思い出す必要があると思います。前進しましょう」

### ○山田浩貴（国語科）

9年前の復活祭で洗礼を受けました。復活とは生まれかわること。その時は、「あれっ？ 洗礼受けても何も変わらないな」と思いましたが、今振り返ると、たしかにあの日、自分は生まれかわったのだと思います。

### ○阿部裕介 (社会科)

「ああ、なんて僕はこんな失敗ばかりするんだらう…僕のバカ、バカ、バカ!!!」私は時折、自分の頭をガンガン壁にぶつけたくなる時があります。

そんな時、私は十字架上のイエスを思い浮かべます。ありとあらゆる罵言雑言を浴びせられ、唾をかけられ、信じていた人からも裏切られ、苦しみの真ただ中にあるイエス。決まってこうささやきかけてくれる気がします。

「大丈夫。私が一緒に苦しんでいるから。だから、安心しなさい。」

こんな私でも、やり直せる…そんな希望を与えてくれるのが、私にとってのイースターです。人間は、生まれ変わることができるはず。

### ○山本健策 (英語科)

皆さんにとっては大昔の1990年3月、私が大学4年生になる直前の春休みに当時、上智大学教授だった越前喜六神父様に洗礼を授かった思い出深い日です。3月21日以後の最初の満月の後の第1日曜日なので、毎年日にちはずれますが、十字架に掛けられて死んだイエス・キリストが3日目に復活したことを記念するキリスト教において最も重要な祭りです。

元々はEasterの前日迄の40日間を肉、卵、乳製品を食べることを禁じられ、Easterの日にそれが解禁になり皆で御馳走を食べて祝うというものでした。皆さんもご家庭でお祝いしてみても如何ですか。

### ○Kristiaan Habacon (英語科)

Did it really happen? Is it really possible? Did a poor carpenter from a small corner of the Roman Empire really die, and then rise from the dead? Of course, he died. But resurrection? If it is false, the Christian message is meaningless. If it is false, Francis Xavier came to this country for nothing. If it is false, the Hidden Christians of Japan died for nothing. If it is false, the Jesuits came to Hiroshima for nothing. But if it is true…

### ○倉光望 (理科)

現在、世界中でコロナと戦っている医師の姿を目に焼きつけてください。これこそMen For Othersです。

### ○松村康平 (社会科)

今から約2000年前、イエス・キリストは十字架にかけられて死に、その弟子たちは散り散りにいってしまった。

その三日後、弟子たちは「イエスが復活した」と言って集まり、彼らは迫害されて、死に至るまでその信仰を捨てなかったという。

「復活」があったからこそ、弟子たちはイエスの「愛」の教えを多くの人に伝えた。

「復活」があったからこそ、イグナチオ・デ・ロヨラはイエスの「愛」の教えを受けとり、イエズス会をつくった。

「復活」があったからこそ、フランシスコ・ザビエルはイエズス会から派遣され、日本にキリスト教を伝えた。

「復活」があったからこそ、第二次世界大戦後、多くのイエズス会士たちが広島のにこの学び舎をつくった。

「復活」があったからこそ、私たちは"いま"この学び舎で、ともに時間を過ごしている。

私たち一人一人は、奇跡的な偶然が幾重にも結ばれた必然の線上にいる。2000年前に弟子たちが体験した「復活」を想うこと、それは"いま"を生きる私たちが、自分自身について考えることにほかならない。

### ○小松原有子（国語科）

イースターといえうさぎと卵の印象しかなかった私のイースターデビューは昨年4月でした。

フィリピンからいらっしゃった二人の先生とともに、聖金曜日のイエスの受難の典礼、そして翌聖土曜日晩の復活のミサに参加しました。私は信者ではないので、参加…というよりおどおどしながら見学していた感じです。

聖金曜日の典礼は観音町教会に行っただけですが、正面のキリスト像に布の覆いがかかっている、いつもと違う雰囲気のある教会に緊張したのを覚えています。

私にとってはまだまだ理解できていないことの多い行事の一つですが、学校で森先生にイースターの卵をもらったときに、掌に何かあたたかいもの＝希望を包んでいるような感覚になって心が弾み、「復活」って嬉しいなあと感じました。

### ○大庭充（英語科）

イエスは復活して  
わたしたち一人一人に

「いのちを与える霊となった」(1 Corinthians 15:45)

真理が虚偽に勝った  
善が悪に勝った  
愛が憎しみに勝った  
いのちが死に勝った  
イエスは復活して

「愛は永遠に滅びない」と教えてくれた  
私たちが自分の十字架を担って  
イエスに従って イエスの霊に導かれて  
神の国をめざそう

### 〔図書紹介〕

本号から図書紹介の企画を始めたいと思います。キリスト教に関係する（あるいは是非とも読んでいただきたい）図書を教員が推薦文を添えてご紹介いたします。

『広島学院物語』（倉光誠一著、広島学院、2013年[第2版]）



“Be Men for Other with Others”の意味について考えるよすがとなるであろう、一冊の本を紹介しよう。2013年に出版した名著『広島学院物語』(改訂版)である。人が昔話をしたがるようになったとき、それは彼が隠退すべき時期にきたということ。しかし実際に一線から退き、現役時代を愛おしむように回想することは貴い業ではあるまいか。特に感謝の心をもって来し方を綴れば、行く末の糧となるからである。感謝とは知恵を忘れないでおくための一助だろうと思う。そして、「知恵」とは知と恵の間にレ点をうって、「恵みを知る」と読めば妙に納得するのはわたしだけではあるまい。

『広島学院物語』の初版3000部は瞬く間に売り切れ、1000部増刷しても同様の事態、再び1000部印刷しても即完売、その後も全国からの注文やら問い合わせは引きも切らず、文化祭やらオープン・スクールにいらっしゃるお客さまにも何度「売り切れ御免」を繰り返したことか。

この本は本学で長く理科を教えられた倉光誠一先生(1932-2014)の回想録である。読み始めれば、大いなる理想を夢中になって熱烈に伝え広める先生の姿が彷彿として現れる。読み進むうちに、先生の個人的な思い出は、実は普遍的な意味をもち、わたしたち学院ファミリー全員の共有財産であることを思い知る。「灯をともしたとき、それを灯の下に置く人はいない。燭台の上に置く。こうすれば家の中のすべての人々のために輝く」(マタイ5・15)。品切れにしておいてはならない本だった。諸君も是非手にとってページをめくってほし

い。

先生の警咳に接し、生活を共にし、直接その薫陶を受けた卒業生諸君や同僚は幸い。しかし先生は今もなお、このご著書を通して、いかにして広島学院がこの地で産声を上げたか、どのように日々育ってきたかを語り、そしてこれからも一步一步理想に向かって歩むべし、と後輩を力強く鼓舞しておられる。

先生はわたしたちに、この共同体の一員であることに誇りと喜びを感じさせてくださる。『物語』を読めば、気高い目的と志をもつこの広島学院に学ぶ生徒諸君とここに勤める教職員がどれほど幸せ(=仕合せ)者かがわかるだろう。

この度、『物語』を再読して、読み落としていたことがいくつかあった。その一つは11頁の写真の下にある「高校入口のケヤキ・私が植えた時は小さな苗木だった」という記事だ。迂闊だった。「翠江園のむかしもいまもみどり明るくつつましやかに～」とはいっても、あんなに都合のいいところに自然に生えているわけではないよねえ。倉光先生お手植の苗木は60年の時を経て、いま美事に成長し、亭々と空を差して聳え立っている。古江の地にしっかりと根を下ろし、わたしたちを日々見守っているケヤキは、広島学院の有形無形の成長の象徴でもある。

漢字の「櫨」は木+擧(手をそろえて持ち上げる)と書く。そのように枝を広げて伸びる大木だからだろう。日がな一日神を見つめ、葉の繁る腕をさし上げて櫨は祈っているのだ。櫨の下にたたずめば微かに音楽が聞こえてくる。梢から和かな調べが流

れてくる。聖歌をうたっているのだ。創造主を賛美し感謝し、学院に集う人々に豊かに恵みあれ、巣立っていくものに幸多かれと。



Where is the Life we have lost in living?  
Where is the wisdom we have lost in  
knowledge?

Where is the knowledge we have lost in  
information? (T. S. Eliot)

詩人は、生きていうちに失ってしまった  
生命はいま何処、知識を集めているうちに  
失ってしまった知恵はいま何処、情報の洪水  
のなかで失ってしまった見識はいま何  
処、と問うている。教えよう。『広島学院物  
語』の中にある。

Tradition cannot be inherited, and if  
you want it you must obtain it by great  
labour.

これも同じ詩人の言葉である。65 期生  
が入学した。古江の丘に光り輝く偉大な伝  
統を、先輩から後輩へ確実に継承してい  
こう。伝統は先輩の背中を見て、ともに呼吸

し、体得していくものだ。それと同時に、  
学院の掲げる「久遠の理想」を熱心に研究  
することも必要だろう。座右に置くべき研  
究書の筆頭はこの『広島学院物語』なので  
ある。

倉光誠一先生のご恩を思い返す度に、  
Anne Morrow Lindbergh の次のことばを  
念ずるのである。

One can never pay in gratitude; one  
can only pay “in kind” somewhere else  
in life. (2020 年復活祭を前にして)

大庭 充

※『広島学院物語』は本校売店にて購入可  
能です。

### 編集後記

ご復活おめでとうございます。

新型コロナウイルスの影響で、3月初め  
から学校は休校となり、3学期末を予定し  
ていた『希望』の発行は難しいと判断し、  
この度「復活祭特別号」として発行するこ  
とにいたしました。

これまで、こんなにも世界中が混乱と恐  
怖とで言葉にすることもできないような  
雰囲気覆われたときがあったでしょう  
か。多くの人々が苦しみときを迎えてい  
ます。しかし一方で、こんなにも世界に「希  
望」が必要なときはありません。イエス・  
キリストが復活した日の静けさの中、一人  
ひとりの心に復活の希望と喜びの灯火を  
絶やさぬよう、ご一緒にお祈りしたいと思  
います。(KM)